



静かに夕映えを待つ 奥は建設中の女神大橋



鏡のような水面に優美な影をおとす「風待橋」



子どもたちが夢中で水と戯れる「水の劇場」



海に沿ってひろびろと広がる「大地の広場」



メインゲートはドラマチックゾーン（照明計画 石井幹子）



花の小島のカフェレストラン 向こうに「あじさい橋」

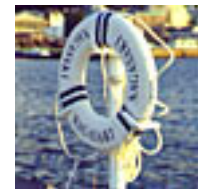


パリのサンマルタン運河を想わせる「オランダ坂橋」



水辺のプロムナード「記憶の回廊」と石のベンチ

歴史をいかし水辺をいかす



長崎—水辺の森公園づくり



上山 良子
うえやま りょうこ

ランドスケープアーキテクト
長岡造形大学大学院 造形学部
環境デザイン学科教授
カリフォルニア大学バークレー校
環境デザイン学部大学院
ランドスケープ学科修了

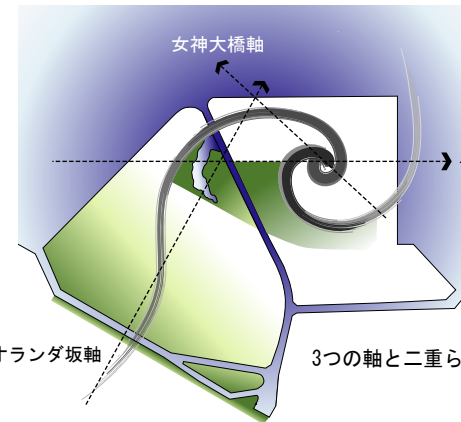
自然と人との共生とは何かを学ぶことの出来る舞台装置、「水の劇場」を創る。

5「24季の演出」を図る。日本の季節の豊かさを気づかせる植栽の演出を図る。

6「100年の系」を鑑みた素材の選択。自然の素材をふんだんに使った空間は時代を超えて子孫の資産となっていくだろう。

デザインの現場

ランドスケープデザインは本来現場監理を行わなくては意味をなさない。生きた素材である樹木や、一つ一つに匠の技を要するフォーリーや石を刻ってモノを創っていくからには現場での監理も一筋縄ではいかない。県や市の作る公園は県の職員が監理を受け持つのが土木造園の分野のならわしである。しかし、これを変えない限り日本のこの分野の発展は望めない。このプロジェクトは知事直轄のアーバンデザイン専門家会議という場があり、しかも現場監理をさせるのは当然



であるというスタンスがあった。監理がなかったら似て非なるものが出来ただろうことは現場の担当者たちはいやというほどわかったはずである。

→ 知事自ら現場に出向き、ばんばん指示を出されるから現場は大変であった。その情熱は担当課長と部下達に乗り移り、モノを創る業者たちにまでつたわっていった。2000本近く入れた樹木のうち700本は長崎はもとより、鹿児島、熊本あるいは栃木まで担当課長と部下達そして私と樹木医がつき、一本一本選んでいった。見るとどうしてもよりいいものが欲しくなり、業

*カナダのジャーナリスト、J. ベニウス女史の提唱。

「美しい街に長崎をしていきたい」という抜群の美的センスの持ち主である知事とスーパードイレクターの伊藤滋先生との出会いなしにはこのプロジェクトはこのような成功をおさめなかったということは明白な事実である。途中まで進んでいたこのプロジェクトを完全に見直すことを条件に伊藤滋は専門家をあつめた「環長崎港地域アーバンデザイン専門家会議」を立ちあげた。

プロジェクト毎に専門家が議論した上で長崎の港のデザインの質を上げていく意図である。以前から長崎の橋や景観をアドバンスして来た篠原修が橋のデザインを担当、アーバンデザインは鈴木崇英、照明デザインは石井幹子、地元の埋め立て反対派を指導して来た林一馬が建築を担当、そして筆者がランドスケープデザイン担当として集められた。

海に突き出た6.5ヘクタールの敷地に立つて改めてこの長崎港の持つ資源の豊かさとも歴史の重さに感動で胸が震えたことを今でも思い出す。21世紀になったばかりの早春のまだ寒い海を見ながら、山が海に迫った長崎には貴重なウォーターフロントのオーブンスペースを、人々が毎日行きたくなるような舞台装置とするにはどういう「場」にするか、現場での大地との対話がはじまった。こんな素晴らしい敷地はランドスケープにかかわるものにとって冥利に尽きる。新たな名所にしようという意欲に燃えた。

デザインコンセプト

- 1「土地の記憶」を生かす。かつて江戸時代にはこの長崎からのみ世界の情報がわが国にもたらされ、幕末のグラバー邸からは日本国を変えようという若者たちが育っていった。この地に21世紀の新しい文化の種まきをする。
- 2「ランドアート」の感覚を大地に刻す。稲佐山をはじめとしてまわりに視点がぐるりと囲んでいるこの地は見られる大地である。新しくできる女神大橋の軸とグラバー軸とオランダ坂軸をうけてたつ、二重螺旋の舞台から情報の種を世界へ発信する場とする。
- 3「コスモフィリア・宇宙愛」を感じる事の出来る広いゆったりとした芝生の大地を創る。
- 4「バイオミミクリー*（生命に学ぶ）の実験場」とする。神の恵みとも思える山からの湧き水を使えることがわかり、自然の水を水槽にためて自然流下で噴水の演出を計る。子供たちは自然の水に触れて、